

史 觀 と 史 體

丹 羽 正 義

近頃歴史學といふものについて、歴史の認識を研究するといふ哲學者から論議が果敢に加へられて居ります。その論議の多くは歴史といふ概念から、現實の歴史學の歴史といふものを論じようとするものであります。しかしながら歴史といふ概念から現實の歴史學の歴史といふものを論ずるといふことは、それがリツカートなどの新カント學派の立場から論ぜられる場合はいふまでもなく、更に現象學派の立場から論ぜられるものであつて、歴史的世界の現象形態を分析して歴史の概念を規定しようとするものである限り、要するに歴史の概念の論議にとゞまるものであつて、この歴史の概念の論議をもつて現實の歴史學の歴史といふものを論ずることはできないとおもふ。

もとより一つの概念として歴史といふものが論理的に

確立されることは論をまたない。しかしそれはあくまで歴史の概念の論議である。それによつて現實の歴史學の歴史といふものを論ずることはできぬ。現實の歴史學の歴史といふ概念は現實の歴史學それ自らのみが規定し得る。したがつて現實の歴史學の歴史といふものを論ずる限り、それは歴史といふ概念から論じ得べきものでなくして、現實の歴史學から論ぜらるべきものである。現實の歴史學の歴史といふものは、まづ現實の歴史學それ自らから規定される。次でそのいくつかの具體的な歴史の概念が一つの普遍的な歴史の概念を規定する。かくの如き一つの普遍的な歴史のみが現實の歴史學の歴史の概念を規定し得るとおもふ。この意味に於て普遍的な歴史といふ概念、即史觀を規定するものは記述された歴史であり、更にその記述された歴史の種々相であるといはねば

ならぬ。そしてこの種々相は歴史の事實によつて規定されることはいふまでもない。かゝる意味に於ける種々相が所謂史體である。劉知幾が史通に於て論じた六家二體といふものはこの面についての論議であるとおもふ。

概念としての歴史といふものはその本来の性格、或はその理想的形像に於て一つの客觀的普遍的なものとして確立されるのであるが、現實の歴史學の歴史といふ概念は、現實の歴史が偶然的要素を有するが故に、理想的形像をなさぬ不完全なものとして時間、空間的な制限をもつ特殊なものではなくてはならぬ。支那の歴史の概念といふものはその概念の理想的形像に於てはヨーロッパの歴史の概念と一つであると考へ得るが、現實に於て常に異つた特殊な具體的なものである。史観は史體によつて規定される。こゝに史學史は成立する。

田邊博士はその史學の意味といふ管ての講演に於て、歴史學とはいかなるものかといふことを考へるには歴史學それ自身の歴史、史學史といふものを考へる必要があるといつて、歴史學は物語り風の歴史から實用的歴史、

即政治史に進み、更に發展的歴史、即文化史に進んで來て居るといつて、それから博士は博士の第四の段階のものとしての綜合史観といふものについて説いて居られる。しかしながらこれはあくまで歴史の概念についての論議であると思ふ。一つの確立された歴史といふ概念を概念の世界に於て論じて居るものに過ぎぬ。博士の歴史といふものは現實の歴史學との關係に於ては一つの確立された歴史の概念を現實の歴史學について論じようとするものである。一つの歴史といふ概念を、概念の世界に於て確立し、かくして確立された概念を現實の歴史學について論ずるものが博士の史學史である。その對象は一つの確立された歴史の概念であつて、現實の歴史學の歴史といふ概念ではない。種々異つた歴史、即現實の歴史學から歴史といふ概念を規定し、確立しようとするものではない。史學史といふものはかくの如きものであらうか。

一つの歴史といふ概念を現實の歴史學にとつて獨斷的に確立して、この概念を現實の歴史學について論ずるも

のであるか、或は種々異つた現實の歴史學から歴史の概念を規定して、その發展を對象とするものであらうか。

支那の史學史、支那の歴史學の發達といふものはどういふものになるであらうか。田邊博士のお考へになつた歴史といふ概念と支那の歴史學の歴史といふ概念とはどういふ關係があるものであらうか。博士が博士の歴史といふ概念をお考へになるについてランケとかランプレヒトとかの歴史といふものを問題にされ、或はランケはヘーゲルの思想、ランプレヒトはヴントの思想の影響をそれぞれ受けて居ると説いて居らるゝが、ランケやランプレヒト、更にヘーゲル、ヴントなどと交渉のない支那の歴史學との關係といふものはどういふことになるものであらうか。支那の歴史學の發達といふものはやはり博士の説かれるやうにランケからランプレヒトへ、ヘーゲルとヴントの思想の影響を受けたその過程を進むものであらうか。

歴史といふ概念から現實の歴史學の歴史といふものは論じ得るものではない。現實の歴史學の歴史といふものは

を規定するものは歴史といふ概念ではない。即史觀ではない。現實の歴史學の歴史といふものを規定するものは現實の歴史學である。記述された歴史のもつ種々相である。即史體である。支那の史學史といふものはどういふものであらうか。支那の歴史學といふものはないといふならば問題ではない。しかし支那の歴史學といふものはある。支那の歴史學といふものがある限り、支那の歴史の概念といふものは支那の歴史學によつて規定されねばならぬ。支那史學史といふものは普遍的な歴史の概念によつて支那の歴史學を規定するものではなくして、支那の歴史學によつて歴史の概念を規定するものでなくてはならぬ。

史記を考へるにあたつてどういふのがほんたうの史記を考へる考へ方であらうか。その考へ方は史記自らが規定するものでなくてはならぬ。史記は歴史とされて居る。史記が歴史である限り、史記の歴史といふ概念は史記によつて規定される。漢書はどうであらうか。漢書の歴史といふ概念は漢書が規定する。たゞ漢書は史記の歴史と

いふ概念をついだものである限り、史記と漢書との間の歴史といふ概念の相異はヘーゲルの辨證法的發展によつて考へられる。史記の歴史といふ概念と漢書の歴史といふ概念の相異は史記と漢書との相異によるものであり、

この相異は更に歴史の事實の相異によつて規定される。

たとへば一は通史であり、一は斷代の史であるといふことでも、司馬遷の時の支那と班固の時の支那とのいろいろな意味に於ける相異に基くとおもはれる。史記を考へ、漢書を考へるにヨーロッパの歴史の概念をもつてするといふことはどういふことになるであらうか。支那の歴史學の發展といふものは現實の支那の歴史學の種々異つた歴史といふものがそれぞれ自ら規定する歴史の概念の發展である。記述された歴史の種々相、即史體から考へられねばならぬ。

歴史といふ概念から歴史學を論じ、普遍的な歴史概念から歴史の特異を説き、歴史の知識の自律性と他律性、歴史の知識に於ける知用の合一を論ずるといふことは、歴史學にとつてはやはり概念による他律であらう。

現實に存する文化は偶然的要素を有する、理想的形像をなさぬ不完全なものであつて、時間、空間的制限を脱し得ぬ特殊なものにすぎぬ。歴史といふものは本來の性格、或はその理想的形像に於ては時間、空間的制限を超越した客觀的普遍的なものであるが、現實に於ては偶然的要素を有するが故に具體的な特殊なものであつて、こゝに歴史の特異といふことが存立し、歴史の知識の自律性と他律性、歴史の知識に於ける知用の合一といふことが自律されると考へ得ぬものであらうか。